

# 大学と附属幼稚園と現場の関係を構築する

—幼児教育未来研究会の試みを通して—

無藤 隆<sup>1</sup> 岩立 京子<sup>2</sup> 西坂 小百合<sup>3</sup> 高濱 裕子<sup>4</sup>

幼児教育・保育界における変動を、幼保一元化、公立の民営化や私立のコスト削減、保育・幼児教育のカリキュラムの再構築、保育の質の第三者評価、資格・資質の高度化の動きなどの観点から展望した。さらに大学からの研修のあり方、附属幼稚園のあり方に関する問題を提起した。次に、大学・附属・現場の三者の「協同」を探求する試みである幼児教育未来研究会について、大学から発信する研修のひとつのモデルを提案した。最後に平成16年度に実施された幼児教育未来研究会について、参加者を対象としたアンケート調査の結果にもとづき、その意義と今後の課題について考察した。

## I 問題

国立大学が法人化し、幼児教育・保育の世界においても大きな変動が起こりつつある中で、大学の研究者や附属幼稚園が互いの関係を形成しつつ、実践現場に寄与していくかの再定義が迫られるであろう。本研究では、そういった状況における課題を論じつつ、具体的にお茶の水女子大学および東京学芸大学の附属幼稚園と保育関係の研究者の協同の試みである「幼児教育未来研究会」の果たしうる役割を展望する。

また、平成16年度に実施された幼児教育未来研究会について、参加者を対象としたアンケート調査から評価し、その意義と今後の課題について考察する。

## II 幼児教育・保育をめぐる動き

幼児教育・保育の実践のあり方をめぐる現場や行政の動きは急速な展開を見せている。その多くが、大学・附属幼稚園の現場への寄与のあり方に影響を与えざるを得ない。

### 1. 幼保一元化の動き

幼保一元化の動きが活発化してきた。幼稚園と保育所を合わせた「総合施設」の設立が国において進められ、平成17年度からは試行事業が始まる。自治体においては、実質的な幼保の行政側の一元化も進んできて

いる。研修を合同化することも増えてきた。両方の免許・資格を持つ人も増え、養成課程ではその両方が取得可能であることは当然のようにもなりつつある。幼稚園教育要領と保育所保育指針のすりあわせも、今後の改訂の折に、さらに強化されることも予想出来る。

幼稚園・保育所・総合施設に共通に、3歳以上の4時間程度を「幼児教育」としてとらえることも普及してきた。同時に、子育て支援や困難な事情にある子ども・保護者への支援もその責務として含まれるようになってきた。幼稚園と保育所ともに、その本来の得意とするところを追求しつつ、互いの重なりが増えてきている。

大学での研究もまた現場への支援も、その重なりをとらえつつ、幼稚園と保育所の両方を視野に入れ、総合施設化への助言も可能にしていかなければならない。幼児教育から学校教育への広がり、乳幼児期全体の育ちへの援助と家庭や特別支援教育などの子ども・保護者への支援までをも含み込んでいく。

### 2. 公立の民営化や私立のコスト削減の動き

公立の民営化や私立のコスト削減の動きもまた急速である。教職員の高齢化にともない、人件費が高くなったことを背景に、常勤の職員を減らす方向での改革が進みつつある。そのことは、保育の質や保育者の水準に深刻な影響をもたらすことが危惧される。

それに対して、大学や附属幼稚園はいかなる手助けが可能であろうか。何より様々な段階と水準と待遇の

キーワード：幼児教育、研究者、大学附属幼稚園、現職教員、教員の資質向上

1 白梅学園大学／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科客員教授 2 東京学芸大学教育学部  
3 東京学芸大学教育学部 4 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター

保育者に応じた多様な援助のあり方を模索すべきであろう。それと同時に、行政に対して研修の必要性を強く訴えていくことも大事になる。

### 3. 保育・幼児教育のカリキュラムの再構築

保育・幼児教育のカリキュラムの再構築が必要となる。一つは、幼小連携のカリキュラムを構築しなければならない。そして、それを見通して、幼児教育全体が小学校以上の教育の基盤として機能しうることを目指すのである。第二に、乳幼児期全体の発達に基づいたカリキュラムを再検討していく。家庭や地域の変化、また保育所・幼稚園・総合施設といった施設の多元化、さらに研究の進展に応じて、新たな全体像を提出出来るはずである。第三に、その上で、幼児期に固有の子どものあり方にふさわしい保育・幼児教育を作り出していくのである。

研修面での課題は、それに対応して多くのことが出てくる。カリキュラムの案を提出することや、カリキュラムを構築するやり方や知見を提供する。既にある多くの理論的・実践的な知識やノウハウをカリキュラム作りに総合化する場を作っていく。

### 4. 保育の質の第三者評価を進める動き

保育の質の第三者評価を進める動きが現実化してきた。総合施設はもちろん、既に保育所は第三者評価が動いている。幼稚園でも始まるかもしれない。義務づけが行われるかどうかはまだ分からないが、大学は義務づけられたので、それに準じて行われる可能性は十分にある。どのような基準で行うのか。どういった領域を想定するか。どこまで立ち入った調査を行うか。誰が行うのか。その訓練はどうするか。結果はどのように生かすか。また公表するか。

ここには、多くの検討すべき課題がある。また、実際に大学などのアカデミックな知見を実践とある特定のルートを通してつながる道が生まれる可能性がある。実際的な仕事も数多く生まれうる。

### 5. 資格・資質の高度化の動き

資格・資質の高度化の動きが広がりつつある。常勤職が減り、臨時採用の職が広がる一方で、保育に求める課題が多くなり、また難しいことも増え、さらなる高い資質が求められる。学歴や資格自体を高度化する動きも増えてきた。それをいかに行うか。実質的なものにするか。中身はどうあればよいのか。制度的なことから研修の内容、また大学や大学院のあり方に至る

まで、問題は広がる。

まさに、研修などの会合の責務はここにある。単に気まぐれのように、ある話題を取り上げるのではその仕事は果たせない。研修としてのプログラムから、カリキュラム化へ進めるには、そこで育成すべき力・資質を明細化して、それを形となるプログラムにおいて実現しなければならない。これまでの研修は、そういったことに比べれば、趣味程度のものに過ぎないと批判を受けてもやむを得ない。カリキュラム化への過程にあるととらえ返し、成果を検討していきたい。

## III 大学からの研修のあり方の再定義化

大学は、第一義的には大学生の教育のために存在する。また、大学教員の研究活動のための場でもある。その上で、大学は従来以上に社会的寄与を重視すべきであろう。そのための一つの手だてが、研修のための研究会などの開催である。

大学の蓄えた知見を分かりやすく提供するという「啓発型」の研修があり得よう。それはもちろん大学の仕事として大事だし、基本である。とはいえ、単純に公開講座といったものはおそらく意味が薄い。もし一般の人を対象とするのではなく、専門的な仕事を抱えた人にその専門性を上げるというねらいを持つのであれば、そのニーズを考慮し、また現状の既有的知識状態を念頭に置いた上で、その知識の改善をねらうということが大切になる。

専門性の高い知見を大学と限らず、専門家に依頼し、実践者につなぐというのも啓発型のバリエーションとしてありうる。大学の持つ知のネットワークの活用としてはむしろ自然なことである。学会などの活動を持ち込むこともあるだろう。

だが、啓発型の限界もあるのではないか。一方的に講義を聴くというスタイルになってしまうという問題がある。だが、それは実習を取り入れれば済む。しかし、実習であっても、技能の教授になるだけであって、高い知見の持ち主が低い側に提供するという構図は変わらない。そのあり方自体を再吟味することを通して、実は、保育に係わる研究は成り立つのではないか。だとしたら、それは当然、研修などのスタイルに反映されてよいはずである。

研究者と実践者の協同的な関係に基づく研究のあり方とまたそれに由来する研修の形を模索するのである。「視点型」とでも呼べるものがあり得る。新たな視点を実践者に提供し、実践を吟味する機会を設けるの

である。その視点は実践を立ち入って理解しつつも、距離を取って、実践を再概念化しようとする研究者の営みから生まれるものである。だから、単に研究の知見を語って、実践の参考にするという意味での視点ではなく、その視点から研究の知見が確かに実践に係わりうるかという吟味を伴う、緊張感のある関係を作り出す働きが不可欠である。研究者役割側と実践者役割側が、互いを理解し、相手を自らに取り入れようとしつつ、すんなりとは可能でないことを大事にし、対話を継続していく。実践に戻り、また研究に立ち戻ったときにも、その対話の過程が視点として各々に継続しうることを目指す。

第三のものとして、「共同開発型」といったものがあるかもしれない。現場の問題を一緒になって考えるのである。実践者が課題としていることについて、研究者もそこに入り、十分な知見も知恵も提供出来ないにしても、一緒になって悩み、考え、次の実践への示唆を得るように努力する。

#### IV 附属幼稚園のあり方への大学の位置づけへの探究

大学の附属幼稚園の働きは既に一度論じたことがある（無藤・岩立・倉持・西坂・森下・青木，2004）。教育実習や大学の授業の場、優れた実践のモデルの提供、大学との共同研究、地域の実践現場への研修を通しての寄与、などがその主なものである。だが、それは、教育機能という当然のことは別として、他はなお今後も機能しうる役割であろうか。

大学との共同研究は、率直に言って、決して楽観出来るものではない。大学側の研究者の発想からすれば、附属幼稚園やそこへ通う子どもは代表的なものではなく、調査対象としにくい。逆に、難しい研究課題だと、附属側として協力しにくい。公立学校の規制緩和に応じた大胆な改革の動きの中で教育的な新たな試みもそちらの方が先に進んでいる面もある。モデルとなるべき教育実践の質も附属幼稚園に進む子どもの質の高さを割り引くと、どれ程高いのかと疑問視する声も少なくない。

だとすると、大学と附属幼稚園の連携に他の現場の教員をいかに巻き込み、協同性を広げていくかという動きが重要になるのではないだろうか。確かに大学の附属幼稚園はその発想の広さと自由さは他の現場と比較にならないほど大きい。様々な試みが許される。実践者に研究活動が義務づけられるということ自体が貴

重なことである。そこに大学の一部であれ研究者が本気でかかわることがあるのも附属幼稚園としてのよさである。研究と実践の交流を協同の関係に高める場としての大学附属幼稚園という見方を提起したいのである。

#### V 幼児教育未来研究会の内容と意義、今後の課題

幼児教育未来研究会は、本学子ども発達教育研究センターの「幼稚園の研修の実践と検討」プロジェクトのひとつとして位置づけられたものである。この研究会は、本センターと東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター、東京学芸大学幼児教育分野、本学附属幼稚園、東京学芸大学附属幼稚園の5つの組織が共同主催し、学内外の実践・研究・行政関係者が学びあい、その資質や専門性を向上させていくこと、そして、研究会の実践を通して保育者研修プログラムを開発することを目指している。また、大学生、大学院生などが運営にかかわったり、参加することで、実践者や研究者の養成という役割も果たしているといえる。

研究会は定例で各月に1回程度、また夏期には実技研修を含むスペシャル研究会も開催される。さらにこうした研究会の内容、方法を共有し、学びのネットワークを普及させるために、運営委員と講師が地方に出張して開催する「出前研修会」を16年度は2回行った。

各回のテーマ（内容）については、参加者のニーズを踏まえつつ、研究会運営委員会が幼児教育を取り巻く今日的及び不易の課題のなかから重要なものを厳選している。研究会の方法は、各テーマに関して実践者から日々の保育の事例を発表してもらい、それに関して専門家がその事例の解釈枠組みの提供、概念の説明、課題の提案などを行い、参加者間で議論ができるように導いていくという方法が基本的にとられている。この方法は、各ライフステージにある参加者それぞれに問題意識・関心の整理、関係づけ、重要な課題の認識を可能にさせ、新たな実践方略や思考の枠組みを提供するものと考えられる。従来の教員研修の方法は、講義型、演習型、協議型とそれらの組み合わせで行われてきたが（岩立，2004）、未来研究会の方法は、保育者・教員の研修の新たな方法を提案するものといえる。

本報告では、出前研修会を除く研究会のテーマ（内容）・事例提供者・助言者を示す（Table 1 参照）とともに、アンケート調査の結果から、研究会を評価し、意義と今後の課題について報告する。

Table 1 平成16年度 幼児教育未来研究会のテーマ及び事例提供者、講師

第1回	2004年4月24日(土) 10:00~12:00 場所 お茶の水女子大学附属幼稚園 テーマ「子育て支援」 事例提供 赤坂榮(足立区立鹿浜幼稚園) 助言 倉持清美(東京学芸大学)
第2回	2004年5月22日(土) 10:00~12:00 場所 東京学芸大学附属竹早小学校 テーマ「道徳性の芽生え」 事例提供 橋本祥子(茨城大学附属幼稚園) 助言 岩立京子(東京学芸大学)
第3回	2004年6月19日(土) 10:00~12:00 場所 お茶の水女子大学附属幼稚園 テーマ「教育課程」 事例提供 井口眞美(東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎) 助言 永井由利子(文京区立柳町幼稚園)
夏のスペシャル研修会	2004年8月21日(土) 10:00~16:00 場所 東京学芸大学芸術館 講演「私の考える幼児教育」 講師 神長美津子(国立教育政策研究所) 実技研修「音で遊ぼう」 講師 井口太(東京学芸大学) シンポジウム「転換期の幼児教育」 話題提供 無藤隆(白梅学園短期大学) 岡上直子(練馬区立光が丘さくら幼稚園) 司会 高濱裕子(お茶の水女子大学)
第4回	2004年9月18日(土) 10:00~12:00 場所 東京学芸大学附属竹早小学校 テーマ「記録のとり方・活かし方」 事例提供 山田有希子(東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎) 助言 河邊貴子(立教女学院短期大学)
第5回	2004年10月16日(土) 10:00~12:00 場所 お茶の水女子大学附属幼稚園 テーマ「表現」 事例提供 上坂本絵里(お茶の水女子大学附属幼稚園) 助言 浜口順子(十文字学園女子大学)
第6回	2004年12月18日(土) 10:00~12:00 場所 お茶の水女子大学附属幼稚園 テーマ「幼保連携」 事例提供 足立祐子(台東区立済美幼稚園) 助言 無藤隆(白梅学園短期大学)
第7回	2005年1月15日(土) 10:00~12:00 場所 東京学芸大学附属竹早小学校 テーマ「特別支援教育」 事例提供 稲川知美(宇都宮大学教育学部附属幼稚園) 助言 高野久美子(文京区教育センター)
第8回	2005年2月26日(土) 10:00~12:00 場所 東京学芸大学附属竹早小学校 テーマ「評価」 講師 秋田喜代美(東京大学)

### 1. アンケート調査の目的

このアンケートの目的は、研究会に対する参加者の参加動機、満足度や要望などを明らかにすることを通して研究会の評価を行うこと、そして、参加者にどのような気づきや学びが生まれたのかを調べることを通して研究会の意義や今後の課題を検証することである。

### 2. 調査及び分析方法

参加者の属性、参加動機、満足度、自由な感想など

を問うアンケートを作成し、参加受付時に資料と共に参加者全員に配布し、研究会終了後に回収した。なお、基本的に事例とそれへの助言という形で行われる定例の研究会と、講演・実技研修・シンポジウムという形で行われるスペシャル研究会とに分けて考察する。

### 3. 結果

#### (1) 定例の研究会

参加者数およびアンケート回答者について

Table 2 は、各回の参加者数、アンケート回答者数、

Table 2 参加者数, 回答者数 (回収率) 及び回答者の年齢と保育経験年数

	参加者数	回答者数	回収率	平均年齢 (幅)	平均経験年数 (幅)
第2回 (5月)	38	23	60.5%	40.0 (24-57)	27.1 (1-37)
第3回 (6月)	56	25	44.6%	47.2 (24-63)	23.6 (1-40)
第4回 (9月)	56	23	41.1%	38.4 (24-54)	13.0 (1-30)
第5回 (10月)	26	20	76.9%	40.5 (23-63)	15.4 (1-36)
第6回 (12月)	49	19	38.9%	42.5 (24-63)	11.4 (1-25)
第7回 (1月)	27	13	48.1%	39.5 (28-57)	14.0 (2-35)
第8回 (2月)	79	26	32.9%	設問なし	14.5 (3-36)
夏スペシャル (8月)	79	25	31.6%	34.2 (22-61)	10.2 (1-36)

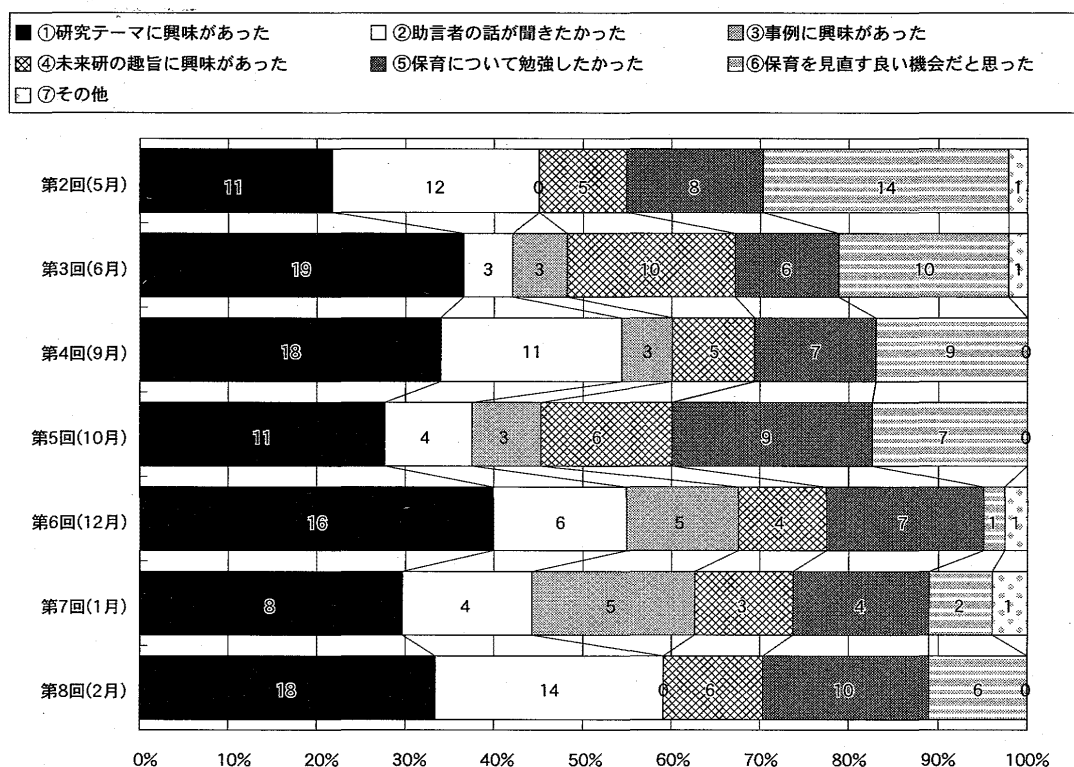


Figure 1 参加動機

回収率、回答者の平均年齢、及び平均保育経験年数を示したものである。各回において参加者の平均人数は47.3名であり、天候などの事情によって少ないときは26~27名のときもあるが、多いときは80名近く参加している回もある（この他主催の大学附属幼稚園教員、運営委員等が各回10~20名程度参加している）。昨年度は会を重ねるごとに参加者数が減少し、最初の参加意欲が次第に薄れた可能性が示されたが（無藤・岩立・倉持・西坂・森下・青木, 2004）、今年度はそのような傾向は見られず、研究会の内容や助言する講師によって参加者数にばらつきが見られた可能性があると考えられる。各回において配布したアンケートの回収率は平均50%であった。

アンケートの回答者の所属は、公立・私立・国立大

学法人附属幼稚園をはじめ、その他保育機関、幼児教育関連企業、及び大学・専門学校の教員、大学院生などであった。年齢、保育経験年数はTable 2に示すように多岐にわたり、幅広い年齢層、経験層から関心が寄せられていることが示されている。

(2) 参加動機について

各回の参加者の参加動機の散らばりを示したものがFigure 1である。各回のテーマに対する関心の高さ、あるいは助言者が誰であるかということに対する関心が結果に反映されているといえる。一方で「未来研の趣旨に興味があった」、「保育について勉強したかった」という回答も、各回を通じて多く見られ、保育について勉強する機会を望んでいる熱心な姿が示されて

いる。また夏のスペシャル研修会については、定例会と同様「研究会のテーマに興味があった」、「保育について勉強したかった」という回答が多かったほか、講演やシンポジウム、及び実技研修それぞれに対して関心が示されており、研究会全体に対する興味と、各内容や講師に対する関心が示された。

(3) 満足度について

満足度を尋ねた結果をまとめたものが、Figure 2である。各回を通じて「満足した」という回答が多く、「少し満足した」という回答を合わせると約8割以上が満足であると回答している。しかし、回によっては「少し満足しない」「満足しない」という回答者もあり、参加者の期待と実際の研究会で得られたものにズレがあったことが示されている。

(4) 研究会の意義と課題（自由記述から）

① 定例研究会の意義と課題

第2回の「道徳性の芽生え」では、それまで漠然と抱いていた道徳性の概念が整理されたこと、また保育実践につながる形で具体的に考え直す機会を得たことなどが参加者の学びとして記述されていた。一方グループディスカッション等、参加者間で議論をしたいという要望もあった。

この回では、事例提供者が自園での道徳性の捉えを子どもの姿から浮かび上がらせて提示し、また助言者からは道徳性の概念やその内容についての理論的な説明が行われた。それと同時に事例をどう考えるかという視点、疑問が助言者から投げかけられたこともあり、事例と助言が結びつき、各々の参加者が課題を持ち帰ることができたといえよう。

第3回の「教育課程」では、教育課程が保育実践と密接にかかわる重要なものであることの再確認ができたこと、参加者各々の園の教育課程を見直し、より活用しやすいものとしてできるための視点を得たことなどが記述されていた。その他、幼小連携についての示唆を得たことも記述されていたが、一方で、教育課程そのものについての概念の説明に対する要望も示されていた。

この回では、事例提供において保育の実践の中から教育課程を見直し、その修正を行ったことが示され、また助言者から教育課程の歴史の変遷や事例園の教育課程の再編における視点が明確化された。これにより、参加者がそれぞれの園での実践の中から教育課程を編成するために必要な視点を持つことができるよう促されたと考えられる。

第4回の「記録のとり方・活かし方」では、事例で提示された記録で用いられた手法・アイデアを自ら

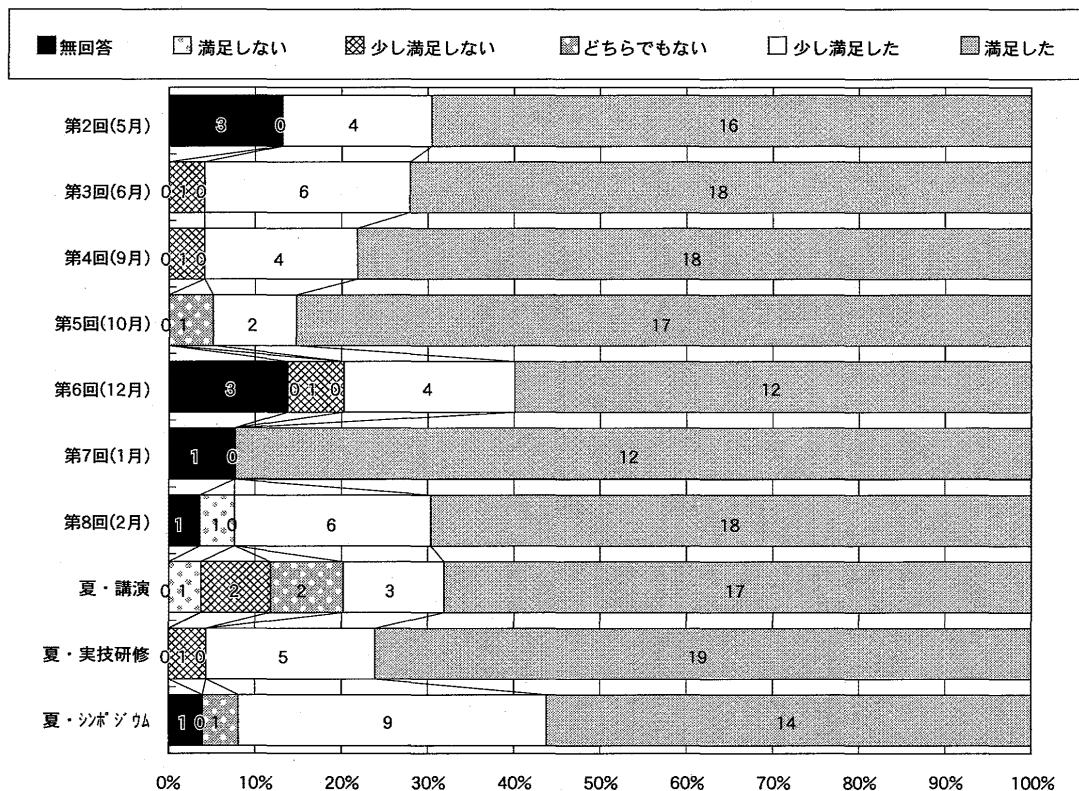


Figure 2 満足度

の保育記録に活かしたいということや、また記録をとることがなぜ必要なのか、そしてそれをどう活かしていくのかということについて、各々が再確認したり、今後の課題として視点を得たことなども記述されていた。

この回は、「記録」という多くの参加者にとって日々密接にかかわるテーマであった。小グループによるディスカッションも行われ、各々の意見を自由に言い合ったことで自分の記録や実践を省みる機会を提供したと考えられる。

第5回の「表現」では、事例の中で保育者としての率直な振り返りが語られたことに対する共感やその姿勢に対する重要性に気付いたこと、それに基づいて具体的に「表現」の内容を整理できたことなども記述されていた。その他、表現を受容すること、理解すること、伝達することについて難しさを感じるとともに、その意味を自分に問いかける機会となったことも記述されていた。また、この回では事例提供園の教員による音楽劇が行われ、その劇に対する高評価が寄せられた。

この回は、子どもと表現との関係について、表現を受容したり、表現そのものが子どもの発達とどのようにかかわっているのかということが整理されたことで、保育における表現の捉え方を各々の参加者が再確認したり整理したりする機会を提供したと考えられる。また、音楽劇が行われたことについては、保育者としての表現力を再考する機会をもたらしたといえる。

第6回の「幼保連携」は、助言者からの行政における総合施設の最新情報に対する感謝、今後の取り組みの方向性に対する視点が見えてきたと同時に難しさや課題も明確になったことが記述されていた。一方で事例が制度的なことに偏り子どもの実態が見えにくくなってしまったこと、事例と助言の内容の主題が一致していないことなど、改善すべき点も寄せられた。

この回は幼保総合施設について審議のまとめが文部科学省・厚生労働省から発表された時期と重なったこと、助言者がその審議に精通していたこともあり、今後の保育の動向に関心が寄せられた回であった。参加者の関心とテーマ及び時期が一致したことで、参加者のニーズに合った情報を提供する機会となり得たが、制度やシステムの話に偏りすぎたことが課題として残された。

第7回の「特別支援教育」では、特別支援教育の考え方が幼児教育の根本的な考え方とつながってくると

いうこと、また特別支援教育を通しての幼稚園の大きな役割（教育機関への信頼）があることなどが参加者の気づきとして記述されていた。また、助言者の経験に基づく具体的な支援の例、障害を持つ子どもの親の気持ち、サポート体制などが紹介され、自身の保育において参考にしたいなどの感想が記述されていた。

この回は、事例提供者が自園で行っている特別支援教育の活動についてその根幹にある考え方を整理したうえで内容を紹介し、それに対して助言者がその意義をわかりやすく解説し、助言者の経験に基づく実践例などが紹介された。これにより、今後の支援体制やその姿勢をどう持つかということに対する示唆を参加者に提供する機会となったといえる。

第8回の「評価」は参加者からは、「評価」に対する考え方・捉え方、新たな知識を得たことについての感想が示され、学びの大きさが記述されていた。事例報告のない回であったため、事例報告があるとよいという感想、逆に事例報告がないことによってじっくり理論や概念を勉強できたという感想もあった。

事例提供のない講話のみの回であったが、評価というテーマや講師に対する関心の高さから参加者数が最も多い回であった。講師は「評価」というテーマに対して、まず理論的背景として評価そのものが小学校以降とのそれとは考え方を異にすること、保育者の同僚性、説明責任と応答責任といった内容を説明し、その後実際の評価のありようについて、様々な実践例を紹介しながら話を進めていった。事例提供のない回ではあったが、各々の保育者が自身の実践を振り返ることにつながったと考えられる。

平成15年度に40の都府県と10の政令指定都市で行われた幼稚園教員研修の実態調査（岩立，2004）によると、幼稚園教員のみを対象としたものは全体の14%、幼稚園と小学校教員を対象としたものは全体のおよそ2%に過ぎず、幼・小・中・高・特殊教育学校の教員を対象としたものが72%と大きな比率を占めていた。全ての学校種に共通する課題もあり、それらのテーマで行う研修も重要であるが、本研究会のように乳幼児期から児童期初期の発達を見据えて、具体的な事例をもとに議論を掘り下げていくような専門的な研修も幼児教育に関わる者の専門性の向上に不可欠であろう。また、研修内容についての調査結果は、今日的課題を反映してか、「情報処理」「障害・特別な配慮を要する子どもへの教育」が全講座の47%を占めており、「情報処理」の研修形式は98%が演習型の実技研修であった。内容の全11カテゴリーのうち、本研究会で取り上



げた同様のテーマは8であり、それらが今日的な課題を反映していたといえよう。

本研究会は事例提供とそれに対する助言という形式をとり、その中で幼児教育に関わる様々な立場、ライフステージにある参加者の学びや気づきを生み出すことを目指してきた。実践者からの事例報告が行われ、各専門家は教育行政や実践の動向を踏まえながら、事例の周辺にある問題群を整理し、実践における日常的な現象に対する解釈枠組みを提供する。そしてその現象の背景にある理論や概念を整理し、説明し、そのなかに問題を位置づけ、焦点化させることによって、日常の保育実践における自明性を問い直すことを可能にするのである。このような試みを通して、相互環流的な実践知と理論知の構築が可能になると考えられる。さらに、問題に対するいくつかの解釈可能性を提案することによって、参加者自らが自己課題に関連させて、自らの実践をもとに振り返り、他者と議論し、新たな視点を得たり、課題を見出したりすることが可能になり、その結果、質の高い実践が生み出されてくると考えられる。本研究会は、その実践を通して保育者の資質の向上につながる研修プログラム（内容、形式、進め方）の一つのあり方を提案した。今後の課題は、本研究会の実践を通して、保育者の発達に適合した研修プログラムの開発についてさらなる研究を推進していくことである。

## ② 夏のスペシャル研究会

スペシャル研究会は定例の研究会と異なる形式で、1日を通して講演会、実技研修、シンポジウムといった内容が盛り込まれている。それぞれの内容に対して参加者から様々な意見や感想が寄せられているが、全体としては幼児教育の新たな動向についての知見を得たこと、自分の保育を振り返ったり今後の保育についての示唆を得る機会となり得たことなどが記述されていた。

講演会のテーマは「私の考える幼児教育」というやや抽象的なものではあったが、講演の内容として現在の幼児教育の大きな揺れ動きの中で課題となる「幼児教育の独自性」をどのように考えるかということに主題が置かれ、その主題に沿った内容で話が構成されていた。ここではその中核となる「環境」の捉えや幼児期から児童期への教育の道筋などについての説明があり、さらにこれらを充実させるための「教師の資質向上」や園内研修といった具体的な課題が提示されたことで、参加者が講演の抽象的なテーマから具体的な課

題へと各々の問題意識を移行させながら考える機会を提供することとなったと考えられる。その結果として、感想には「環境にこだわる」ことの重要性に対する気づきや、そのための教師に求められる専門性とは何かということを知り得たことなどが記述されていた。

またシンポジウム「転換期の幼児教育」も前述の講演会「私の考える幼児教育」と同様、幼児教育が転換期を迎える中で抱えている課題が各シンポジストから紹介された。無藤氏からは幼児教育が充実していくために重要だと考えている事項として、幼小連携のなかでの幼児教育の充実としての「協同的学び」と「学びの芽生え」ということ、2・3歳児を視野に入れた乳幼児期の教育カリキュラム、子育て支援、園の教育力を伸ばすための研修機会の保障、自己評価・外部評価の実現、幼児教育センターを地域ごとに設立すること、という6点が提示された。そして各々の事項についてその重要性や実現に向けた課題が説明された。岡上氏からは、「学び」というものの重要性やそれが幼稚園教育のなかでどのように捉えられてきたのかということについて、実践経験に基づいた提言が行われた。具体的な事例を紹介しながら「学び」の大切さ、無意識の「学び」に注目すること、それらが「学びの芽生え」につながるなどが提示された。無藤氏からは転換期を迎えた幼児教育における様々な課題について、そして岡上氏からはそのなかでも特に「学び」の重要性について事例を交えて提言が行われた。大きな転換期を迎えている幼児教育において、多くの重要な課題があることを参加者は認識し、さらに多くの課題があるなかで「学び」というものに対して気づきや再認識を促す機会を提供したと考えられる。その結果、感想には「無意識の学び」、「学びの芽生え」、「遊びの中の学び」といった「学び」というキーワードに関する新たな学びがあったこと、そしてこの「学び」にかかわる子どもの育ちのために今後の新たな課題が見出されたことなどが記述されていた。

講演会とシンポジウムの合間に行われた実技研修「音で遊ぼう」では、参加者が座席から離れて集まり、「トーンチャイム」という楽器を持ち、実際に音を出しながら音質の違いを感じたり、音階を分けて自由に音を出すことで自然に作り出される沖縄民謡調や平拍子の音階を奏でていた(写真参照)。これはつつい現代音階の12音階に捉われやすい音楽表現活動において、あえてそこにこだわらないことに対する気づきを促すとともに、参加者が楽器を持って音を出すことで自ら表現者として表現することのすばらしさを体感す





る機会を提供したと考えられる。参加者からは「トーンチャイム」という新たな教材の知識を得たこと、また自らが表現者となることの面白さを感じたこと、保育実践に導入することを検討したことなどが感想として寄せられていた。

夏のスペシャル研究会では、定例会とは異なり、講演会、シンポジウム、そして、それらの合間に実技研修を行うものであったが、教育行政の動向や実践の場を熟知した講師やシンポジストによる問題の整理や問題提起は参加者に自らの保育への振り返りや新たな課題への気づきなどをもたらしたのではないと思われる。

## VI まとめと今後の課題

お茶の水女子大学と東京学芸大学の附属幼稚園と保育関係の研究者は幼児教育未来研究会という営みを通して、大学と附属、さらに大学と附属とその他の幼児教育・保育現場との協同的なかかわりを探求してきた。幼児教育・保育をめぐる大きな変動が起こりつつあるなかで、大学の研究者や附属幼稚園がいかに互いの関係を形成しつつ、実践現場に寄与していくかの再定義が迫られている。

本研究では、まず、幼児教育・保育の実践のあり方をめぐる現場や行政の動きを展望し、大学からの研修のあり方、附属幼稚園のあり方に関する問題提起を行った。次に、大学・附属・その他の現場との三者の

「交流」からより意味のある「協同」を探求する試みである幼児教育未来研究会について、そのテーマと方法、参加者の経験を考察することを通して、大学から発信する研修の一つのモデルを提案した。今後はさらに、研修プログラムの開発、共同研究、優れた実践モデルの提供などを通して、新たな時代における大学と附属の協同的關係、そして、その関係性から生まれる実践の場への寄与について探求していくことが課題である。

## 引用文献

- 岩立京子. 2004 全国(都道府県及び政令指定都市)幼稚園教員研修実態調査 幼稚園教員・小学校教員の資質向上を支援する研修プログラムの開発(2)～研修プログラムの試行と分析～ 平成15年度広域科学教科教育学研究経費研究成果報告書 14-24.
- 無藤隆・岩立京子・倉持清美・西坂小百合・森下葉子・青木聡子. 2004 保育者研修において附属幼稚園が果たす役割—幼児教育未来研究会を通して— 子ども発達教育研究センター(旧子どもの発達研究センター) 紀要 1, 1-11.